

【図書紹介】

「太平洋戦争下」の障害者問題を学ぶ：清水寛著『太平洋戦争下の全国の障害児学校―被害と翼賛』、『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所―多磨全生園を中心に』を読んで

金丸 彰寿（神戸松蔭女子学院大学）

E-mail : kanamaru1990@shoin.ac.jp

1 はじめに

本稿は、清水寛氏（埼玉大学名誉教授）が上梓した2冊の図書紹介である。清水氏は、半世紀以上にわたって、障害児者の発達保障を志向する研究に取り組んでいる。次頁の表1に、とても大まかであるが、清水氏の生い立ちと研究の歩みをまとめた。障害児教育史をベースにしつつ、多岐にわたる研究の展開がわかる。

これ以降、本文では清水氏を著者と表記する。紹介する図書は以下の通りである。

- ①『太平洋戦争下の全国の障害児学校―被害と翼賛』、2018年10月、新日本出版社、520頁。
- ②『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所―多磨全生園を中心に』、2019年12月、新日本出版社、597頁。

①と②それぞれ、500頁を超える分量であり、30年以上にわたる著者の仕事をまとめ上げた成果物である。

①については河合（2019a）、西島（2019）、岡田（2019）が、②については青木（2020）、河合（2019b）、大高（2021）、輪倉（2021）が、すでに書評ないし図書紹介を行っている。①と②それぞれに対して、わかりやすい解説と今後の研究への論点が提示されている。

とくに河合（2019b）は、14頁にわたって①の書評を行っている。河合（2019b、p.136）によると、「戦争・軍隊と障害者問題」は、「障害のある人々の人間としての尊厳と権利の無差別平等を希求してや

まない清水教育史学の中核を構成するもの」ととらえられている。

①の著書は、こうした「『戦争・軍隊と障害者問題』の史的研究のなかに位置付けて読むことで、その意義がいっそう鮮明になるはずである」という。そして河合（2019b、p.139）は、「『太平洋戦争下の全国の障害児学校』の実像を、戦時下を生きた障害児や教師たちの体験に即して描き出そうとしたところに意義と特徴が認められる」と指摘している。

他方、輪倉（2021、p.93）は、②の著書における視点が、「ハンセン病政策の側面のみに偏ったものではなく、あくまでもその政策下で患者・患児がどのように生きようとしたのかという政策への『応答』の側面をできる限り拾い上げる」ことにあると指摘している。

さらに、「『弱者』と呼ばれる人々の置かれた状況を解明しようとする際に総力戦期とりわけ太平洋戦争期に焦点を当てようと考えたことは著者の基底にある問題意識からすれば当然」という（輪倉2021、p.94）。つまり、河合も指摘した「戦争・軍隊と障害者問題」を解明する上で、ハンセン病史を外すことはできないとみなす著者の問題意識がある。②の著書もまた、清水教育史学の「中核」をなすものといえる。

ここに、本図書紹介の意味があると考える。清水教育史学の「中核」を理解する上で、「太平洋戦争下」の時代を対象とした、上記2冊を総合的に読み解くことは重要である。

さらに、その読み解きは、現代の障害者問題の解決を考える上でも示唆に富むものであろう。とても非力な紹介者ではあるが、筆者の研究にかける思いや原体験にも触れながら、本書の紹介を行っていき

表 1 清水寛の生い立ちと研究のあゆみの概観

年	月	内 容	備考
1936	7	東京都で誕生	
1955	3	東京都立白鷗高等学校 卒業	
1956	4	東京教育大学教育学部特殊教育学科 入学	
1960	4	同上大学 卒業	
1961	4	東京教育大学大学院教育学研究科教育学専攻修士課程 入学	
1964	2	【修士論文】「日本精神薄弱児教育の成立・展開過程に関する研究—明治・大正初期に於けるその目的と方法を中心として—」東京教育大学大学院教育学研究科教育学教室編（上下巻 980 頁，別冊付：文献目録 84 頁）	論文，単
1964	4	同上大学院 修了 教育学（修士）	
1964	4	東京都豊島区立大塚中学校特殊学級非常勤講師（1969 年 3 月まで）	教育経験
1965	5	東京教育大学大学院教育学研究科教育学専攻博士課程 入学	
1966	12	「近藤益雄における生活綴方教育から精神薄弱児教育への発展」『東京教育大学 教育学研究集録』第 6 集	論文，単
1967	8	全国障害者問題研究会結成，同研究会全国委員会事務局局長就任（1969 年 8 月）	
1969	3	「わが国における障害児の『教育を受ける権利』の歴史—憲法・教育基本法制下における障害児の学習権—」『教育学研究』第 36 巻第 1 号	論文，単
1969	3	同上大学院 単位取得満期退学	
1969	4	埼玉大学教育学部 着任	
1974	10	「精神薄弱教育史」梅根悟（監修）・世界教育史研究会編『障害児教育史』（『世界教育史体系第 33 巻）講談社／共著者：荒川勇・石部元雄・小川克正・加藤康昭・小宮山倭・菅田洋一郎・山口洋史	図書，分
1974	10	「障害者の権利保障の基本的方向性と課題」梅根悟（監修）・世界教育史研究会編『障害児教育史』（『世界教育史体系第 33 巻）講談社	図書，分
1976	8	『君がいてはくがある—共同教育を志向する実践—』ミネルヴァ書房／共編者：青木嗣夫	図書，共
1976	8	「『夜明け前の子どもたち』に学ぶ」『人権と教育』第 51 号／大西問題を契機として教育権を実現する会編	論文，単
1976	12	「戦後障害者福祉と発達保障—近江学園における糸賀一雄の『発達保障』の立場に立つ福祉思想の形成過程—」吉田久一編『戦後社会福祉の展開』ドメス出版	図書，分
1979	12	「発達する権利とその保障」大田堯ほか編『発達の保障と教育』（『岩波講座・子どもの発達と教育』第 7 巻）岩波書店	図書，分
1980	8	『学ぶこと生きること—未来の教師たちへ—』ぶどう社	図書，単
1981	4	『障害児教育とはなにか—教育の真実を求めて—』青木書店	図書，単
1981	12	『発達保障思想の探求—障害児教育の史的探求—』青木書店	図書，単
1984	2	「共同教育と統合教育の実践—教育的統合をめざして—」『共同教育と統合教育の実践』青木書店／編者	図書，編
1987	8	「発達保障運動の生成と全障研運動」『発達保障の探求』全障研出版部／共編者：田中昌人	図書，編
1989	3	「第 2 次大戦下の全国の障害児学校・学級および障害者施設の戦争被害に関する実態調査」『埼玉大学教育学部紀要 教育学部〔教育科学〕』第 38 巻第 1 号	論文，単

1992	2	「E.Oセガンの障害児教育における教師論」『埼玉大学教育実践研究指導センター紀要』／「同上タイトルⅠ」第5号(92年3月),「同上Ⅱ」第6号(93年3月),「同上Ⅲ」第7号(94年3月)	論文, 単
1994	3	『東京都教育史』／作成の専門委員／第1巻(94年3月), 第2巻(95年3月), 第3巻(96年3月), 第4巻(97年3月)	図書, 分
1996	3	「滝乃川学園小史・戦前編」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』／「同上タイトルⅠ」第45巻第1号(96年3月),「同上Ⅱ」第45巻第2号(96年9月),「同上Ⅲ」第46巻第1号(97年3月)	論文, 単
1997	9	「アジア・太平洋戦争下の優生政策と障害者問題」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』／「同上タイトルⅠ」第46巻第2号(97年9月),「同上Ⅱ」第47巻第1号(98年3月)	論文, 単
1999	3	「日本ハンセン病児問題史研究」『埼玉大学紀要教育学部(教育学科)』／「同上タイトルⅠ」第48巻第1号(99年3月),「同上Ⅱ」第48巻第2号(99年9月)	論文, 単
2000	2	「アジア・太平洋戦争下の日本帝国陸軍と『精神薄弱』兵士—国府台陸軍病院の『病床日誌(1945年分)』の分析—」『障害者研究』第27巻第4号	論文, 単
2002	3	埼玉大学 退官	
2004	6	『セガン：知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践—』日本図書センター	図書, 編
2004	10	特別寄稿「発達保障論の意義と課題—障害者問題史研究の立場から—」『人間発達研究所通信』第2巻第7号	論文, 単
2005	12	「台湾におけるハンセン病政策／解説」『近現代日本ハンセン病問題資料集成：編集復刻版』補巻7, 不二出版／共編者：平田勝政	図書, 編
2006	12	『日本帝国陸軍と精神障害兵士』不二出版	図書, 編
2009	6	『この子らと生きて：近藤益雄と知的障がい児の生活教育：写真記録』日本図書センター	図書, 編
2016	10	『ハンセン病児問題史研究：国に隔離された子ら』新日本出版社	図書, 編
2018	10	『太平洋戦争下の全国の障害児学校—被害と翼賛—』新日本出版社	図書, 単
2019	12	『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所—多磨全生園を中心に—』新日本出版社	図書, 単

注：上表は西村(2002), 高橋・清水(2003), 小川・清水(2021)を用いて作成した。著者の研究を全て網羅できてはいないことに注意されたい。なお備考欄は, 研究成果を論文／図書と, 単著／共著／編著／分担執筆で分類した結果である。

たい。

(1931：満州事変～1945年：ポツダム宣言)と呼ぶこともある。

2 取り上げる2冊の構成と内容

まず, ①『太平洋戦争下の全国の障害児学校』と, ②『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所』の概要について紹介する。

なお対象時期については, 1931～45年の範囲であるが, とくに1941年12月～1945年8月の時期に焦点が当てられている。1931年は, 日本の関東軍が柳条湖事件を引き起こし, 旧満州が制圧された「満州事変」に発展した時期である。この満州事変がアジア・太平洋戦争のきっかけになったという歴史観においては, この一連の戦争を「15年戦争」

(1) 『太平洋戦争下の全国の障害児学校』

①の目的は, 「本書は『被害』と同時に, 戦時体制への『翼賛』, すなわち戦争・軍国主義への同調・協力・加担の面も重視し, 総合的に論証しようとする」ことである(p.4: 以下, 本節で①を引用する場合は頁数のみ記載する)。

本書は, 著者によって1989年に発表された「第2次大戦下の全国の障害児学校の戦争被害の実態(中間報告)」(清水1989)が基になっている。戦前から存続する障害児学校108校と, 戦時中に勤務していた障害児学校の元教職員に行ったアンケート調

査を踏まえて、「戦争被害の実態」について整理・分析したものである。障害児学校のほとんどは、盲学校、聾学校、盲聾学校、聾聾学校であった。

なお河合（2019b）は、本書の副題の「被害と翼賛」が、本書を通底する分析枠組みとして位置付けられていると評価している。

紙幅の都合と読みやすさを考慮して、節項は省略した上で、目次を紹介する。

序章

第1章 空爆による被害

第2章 学校集団疎開

第3章 勤労奉仕・勤労動員

第4章 学校運営と教育活動

第5章 敗戦後の窮乏と復興へのとりくみ

補章 旧植民地台湾・朝鮮の障害児学校

第1章では、調査対象の障害児学校108校の空爆による被害の実態及びその特徴が、整理・分析されている。太平洋戦争下における障害児学校のおよそ4割が、何らかの空爆による被害を受けたという。これらの被害状況が、学校の年史やアンケートの自由記述から事例として分析されている。

ただし、校舎や寄宿舎などの消失・一部破損といった物的被害に比べて、「人命の損傷は少な」かったという（p.62）。著者は、その要因について、下記を指摘している。第1に、疎開、休校措置や夏期休業による帰省などによって児童生徒が、通常より学校にいなかったことである。第2に、防空壕の作成も含めた「防護体制と避難訓練」の成果である。空爆を受ける前から学校で行われた。第3に、教職員の避難誘導などの判断や誘導の適切性である。第4に、「防空壕や寄宿舎から脱出する際の盲・聾の努力と協力」である。

第2章では、障害児の集団疎開について、東京都立光明国民学校（肢体不自由を対象）、国立東京盲学校、国立東京聾聾学校、大阪市立思斉国民学校（知的障害を対象）の事例から、整理・分析されている。

そもそも学童疎開とは、空襲を受ける都市から農村部に子どもたちを移動させることである。著者は、疎開に関する研究を紹介しつつ、疎開には、①兵隊を散開させて対峙する「歩兵戦法」を大都市の人員や建物を地方に移動させる施策に流用したと見る説と、人口や建物を制限して都市環境を整備する「都市計画の手法」と見る説の、二つがあることを示す。

中でも学童疎開は、子どもたちという「次世代の戦力」として温存する「戦闘配置」であるという性

質を持ちつつも、「次世代の戦力」として期待できない障害児は「足手まとい」として遠ざける意味を持った。ただし障害児学校は、障害児の命を守るために、「戦闘配置」としての疎開を活用することになる。

本章では、疎開を行った34校について、疎開期間や疎開先などの状況をまとめた一覧表がまとめられている。それらの学校の疎開状況について、事例的に検討されており、障害児の生活困難な実態が浮き彫りになった。

とはいえ、光明国民学校の事例のように、1945年3月の東京大空襲を契機に、長野県の上山田ホテルに疎開したことで、空爆から逃れることができたことも指摘されている。長野県から疎開した10日後に、光明国民学校の校舎は空爆によってほぼ全焼している。

また、思斉国民学校が疎開から引き上げた時に、村人一人も見送りに来なかったことも明らかになっている。ただし、「近くのおばあさんが涙を流して、手ぬぐいを振ってくれたことがうれしく」、これまでの「苦労を忘れさせてくれた。それが唯一の素朴な人情味であった」という回想も残されている。戦時下の障害児への社会的な意識の一端が読み取れる。

本章では、こうした疎開にまつわる経験が事例的に記述されることで、疎開政策のもつ人権侵害（生存権の侵害）の状況が、障害児を通して如実に示された。

第3章では、障害児学校における勤労奉仕・勤労動員の実態が整理・分析されている。「血願書」を作成して軍需作業に動員させたり、援農をさせたりしたことがわかった。また、はり、鍼、あんま、マッサージなどの治療奉仕も行われていた。これに関連して、「海軍技療手」「陸軍技療手」に志願し、戦死した盲学校／盲聾学校の生徒がいたことも紹介されている。

そして、障害児学校における勤労奉仕・勤労動員については、下記のように総括された。すなわち、「太平洋戦争下の障害児学校や障害を受けている人たちが、通常の学校や健常の人たちと同じように、あるいはそれ以上に、戦争による被害と人権侵害を受けると同時に、国の戦争政策・軍国主義に翼賛し、戦争に協力し加担していった面がある」ということである。本書の副題にある「翼賛」の視点が浮き彫りになった。

第4章では、太平洋戦争下の障害児学校の学校運営と教育活動の内容について、整理・分析されている。障害児学校において、さまざまな時間と場所を

用いて、「錬成実践」が展開されたことが明らかになった。例えば、点字による「教育勅語の早書き競争」などの自己修養、「軍事教練」、命の危険にも及ぶ「夜行軍」などである。

さらに障害児学校の教職員不足や、寄宿舎における食料・燃料不足、寄生虫・害虫の被害が深刻であったという。一方で、戦時下であっても教師と生徒の「人間的共感関係」も確かにあったという。それは、「家庭的な親愛によって結ばれ」ながら、「趣味・才能を生かし集団での文化的・芸能的活動を楽しんでいる」様子として紹介されている（pp.282-283）。こうした「人間的共感関係」が、生徒の「人格的感化」を促したという。

なお盲・聾唖学校の「混合教育」（視覚障害児や聴覚障害児を分けずに、同じ教育課程において教育すること）の様子や、ヘレン・ケラーの来日訪問（1回目1937年、2回目1948年、1955年）についても紹介されている。1回目の訪問は、日中戦争の開始年度であり、太平洋戦争を「15年戦争」と考えると戦争期間に位置づく。なお1回目の訪問先には、日本の統治下であった、朝鮮と旧満州も含まれていたという。

第5章では、障害児学校における敗戦後の窮乏と復興について、学校史から整理・分析されている。空襲による障害児学校の校舎の破壊、物資不足・食糧難の中であっても、授業を再開しようとする教職員の様子も併せて記述されている。窮乏の間であっても、学校生活を復興しようとする教職員の努力が伺い知れる。この点について、大阪市立盲学校においては、GHQと総司令部民間情報教育局の文書に学びながら、軍国主義からの脱却と民主化政策を受け止め、復興に向かう取り組みをしようとした実践運動の一端を知ることができる。

そして、障害児教育における戦前から戦後の史的区分について、「憲法・教育基本法制が成立し、学校教育法が定めた特殊教育諸学校の義務教育制のうち、一般の小・中学校の義務教育制に1年遅れて逐年進行で盲学校・聾学校の義務教育が実施され始めた一九四八年度を分岐点とすることが妥当である」（p.359）と提起された。

補章では、日本の植民地であった、台湾と朝鮮の障害児学校と特殊教育制度について整理・分析されている。盲聾教育が中心である。本章は、「本書が書名に『太平洋戦争下』のそして『全国の』と銘打っているからには、その時期に日本が領有地とした植民地の台湾・朝鮮・『満州』（中国東北部）に存在した障害児学校をも対象として位置付けなくてはなら

ない」という著者の意図から位置付けられた（p.372）。

（2）『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所』

②『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所』の目的は、「“特殊日本型”のハンセン病患者に対する〈強制収容・絶対隔離・義務労役・絶滅・民族浄化政策〉と〈在園患者たちの相互扶助的組織の活動〉との関係、その実態について、太平洋戦争下の国立療養所多磨全生園を中心にして実証的に究明していくこと」（p.12：以下、本節で②を引用する場合は頁数のみ記載する）とされている。

大高（2021, p.96）の書評によると、本書の課題設定においては、「近代日本におけるハンセン病対策は全ての患者を生涯にわたって強制的に療養所に収容し、優生思想と結びついて患者の根絶を目的としたもので、療養所はその試みが実行されたもの」という著者の考え方が反映されているという。

こうした特徴が、太平洋戦争下の極限状況において、園当局による施設運営と、それへの入園者サイドの対応（対抗）という論点の中で明らかになっていく。

全正常会とは、元は患者組織であった「舎長会」が総力戦体制を支えるべく、全生園当局によって再編成された園の補助機関であり、国家総動員体制を維持する末端組織としての市井の隣組組織にならって、ハンセン病患者の隔離保護を継次するため組織されたものである。園サイドとしては統制のための組織でありつつも、患者サイドからすると当局の意向の範囲ではあるが、患者の自治権を保障できる側面があったという。中心となる史料は、園当局職員作成の日誌や園サイドの記録である。

紙幅の都合と読みやすさを考慮して、ここでも節項は省略した上で、目次を紹介する。

序章	患者取り締まりと勤務日誌に見るその実際
第1章	国家総動員体制と全生常会の発足
第2章	戦時下の癩療養所入所者の死亡の増加と精神科病院入院者の死亡率との比較検討
第3章	全生病院・多磨全生園における患者附添看護・介補
第4章	「全生常会」による食料の増産と供給をめざす患者作業
第5章	国家的儀式への参加と国策への協力
第6章	皇室への報恩活動
第7章	スポーツ
第8章	「全生座」歌舞伎の上演
第9章	文学活動

第10章 防空・防火活動

補章 戦時体制下の他の国立ハンセン病療養所

第1章では、国家総動員体制下で組織された、全生常会の概要について整理・分析されている。同会は、「患者たちの力を利用し、かつ統制していく必要に迫られた」園当局と、「自らの生命を守るために患者組織の整備・強化が求められた」患者サイドのはざまに組織されたという（p.58）。

第2章では、入園患者の死亡率について、精神病院とのそれと比較しながら、整理・分析されている。比較の理由は、「慢性疾患入院療養施設における死亡率は、その施設が医療機関と呼ぶに値するかどうかの重要な指標である」（p.77）とする岡田靖雄の論（1981a／1981b）を参考にしているからだという。

結果を摘要すると、園患者の死亡率はおおよそ9%であり、1945年には10%を超えていたことが明らかになっている。その理由については、食料不足による栄養失調であることを、都立松沢病院に関する先行研究と併せて考察されている。

第3章では、園の患者作業の一つであった、全生常会による組織的な患者付添看護・介補について整理・分析されている。患者付添看護・介補とは、患者が少額の作業料で、患者の介護や援助を行う仕事である。表面的には相互扶助に見えるが、実際は療養所における医療体制の不備を背景にした、「不当労働」であった。

全生常会は、あくまでも園の補助機関であったため、上位下達的で従属的な役割を担ったとされている。一方で、重症の患者の介護は、全生常会がなくては成立しなかったとされている。実際の介護現場では、全生常会の独自の働きと自治が認められていたという。

第4章では、食糧不足の慢性化の中で、全生常会がどのように食料増産と供給を目指したかについて整理・分析されている。著者の調査によると、太平洋戦争下には定員1200人の園に、1500人ほど収容されていたという。そのため、一人当たりの食費がかなり低く抑えられていた。国からは、園での自給自足の取り組みを求められたため、全生常会では農事部が食糧の増産と供給を担っていった。なお園内での農作物の盗難被害の記録も紹介されており、園内の困窮した状況が窺える。

第5章では、全生常会を通して、国家的儀式への参加や、国防献金などの国策に協力していくプロセスについて整理・分析されている。本書で述べられた国家的儀式については、下記の通りである。すな

わち、四方拝（天皇の宮中行事）、紀元節、天長節、明治節（国が定めた祝日）、大詔奉戴日（宣戦の詔書発布の日）であった。ハンセン病患者であっても、皇国民として行事に全員参加することが求められた。国による隔離の状況にあっても、皇国民としての思いと姿勢を維持するという患者の葛藤が如実に現れている。

第6章では、皇室への報恩活動が整理・分析されている。皇室による「御慈悲」（思召）への感謝として、「皇太后陛下御誕辰記念奉祝週間」と「御恵の日」を実施したという。これらの行事に付随して、スポーツや文化的行事も実施されていたが、同時に園当局による患者へのガス抜きも兼ねていたという。

第7章では、野球を中心にしたスポーツ活動について整理・分析されている。昭和初期に、学生野球の隆盛とともに、野球が国民的スポーツになっていた。それもあるが、職員チームと患者チームの対抗戦や園外のチームとの試合も行われたという。

第8章では、患者の文化活動の一環であった「全生座」歌舞伎について、整理・分析されている。全生座は、全生常会発足前から行われた取り組みである。演劇や準備も含めて、患者は精力的に取り組んだ表現活動であり、園外の様々な人間が観覧したという。園サイドからの援助も積極的であったとされる。それは、社会に対して、園での療養生活を説明し、理解を得るためのパフォーマンスとしても位置づいたという。

第9章では、患者の文芸活動について整理・分析されている。著者は、記録を通じて患者が、前線に出ることができず、銃後にいることに葛藤しながらも、「自己の生を認識」する上で、文芸活動が大きく貢献したと指摘している（p.475）。

第10章では、園内における戦時の防空・防火活動について整理・分析されている。園に直接的な空襲被害はなかったが、園の所在地の東村山市にはいくつも空襲があった。そのため、園は、防空壕の設置と、警戒発令・空襲警報が出された時の対応や「防空日」を設定した取り組みを行う。さらに全生常会主導で、園の承認を得て「隣組夜警隊」も設置されたという。

補章では、12の国立療養所と植民地であった台湾、朝鮮、旧満州の官立療養所における患者処遇について、整理・分析されている。著者は、30年にわたる聞き取り調査や園史をふんだんに用いて分析を試みている。概括すると、患者は、隔離監禁のもとでの生活の困窮の中で、強制労働によって人権侵害を受けていたと指摘されている。

3 結びに代えて

(1) 著者の原体験

冒頭で述べたように、著者の半生をかけたライフワークの集大成となったのが、上記2冊である。

紹介者は、これらを読んだとき、著者の「戦争・軍隊と障害者問題」にかける思いと熱量をひしひしと感じた。紹介者は、恥ずかしながら、戦前の障害児教育史についてはテキストで読んだ程度であり、勉強しながら書籍を読み進めた。紹介者の知識不足で、一回読んだだけでは理解しきれず、図書紹介や書評を辞書代わりにしつつ、繰り返し読んだ。そして、内容はもとより、読むたびに著者の思いを強く感じた。

この著者の思いには、原体験があるという(清水2021:2022)。著者は、1936年に東京の下町で5人きょうだいの次男として生まれた。太平洋戦争の真っ只中である。

著者は幼少時、身体が弱かったとされる。またあるとき、足で踏む縄ない機に手を挟まれ、右手の親指を砕く事故を経験した。泣き叫ぶ著者は母に、「泣く子は強い兵隊さんになれないよ!」(清水2022, p.77)と言われた。そのこともあり著者は、片道5キロの病院に着くまで我慢したという。

著者は、この時を振り返り、我慢できた理由を「きつと小さいときから体が弱く、いくじなしであった私はそれだけに男に生まれたからには強い兵隊さんになりたいと幼いなりに思い詰めていたからではないか(紹介者注:下線部は紹介者による)」と述べている(清水2022, p.78)。

こうしたこともあり、著者は、「男子でありながら兵員になれないとみなされることは屈辱であり、どんなに辛いことがあっても泣かないで強い兵員にならねばと思ひ込んでいた(紹介者注:下線部は紹介者による)」とされる。

また、歯ブラシ商をしていた父の戦争体験と晩年の心理状態も、著者にとっての原体験であった。1944年に、満州に派遣された著者の父は、敗戦後、2年近くシベリアに抑留された。

父は「妻子に会うまで死ねない」(清水2021, p.9)という「強い願いが生きる力」となり、復員した。しかし、晩年に脳梗塞と認知症を発症し、「ソ連兵が攻めてくるぞ、逃げろ!」という幻覚的な症状を表していたという(清水2021, p.9)。

著者は、こうした経験によって教えられたことを下記のように述べている。すなわち「戦争は体験し

たときに苦しみ、老いて心身が衰えたとき、からだや心の底に深く刻まれた恐怖が蘇り、再び今、戦場にいるかのように苦悩してやまないものである」(清水2021, p.9)。

上述した原体験をもって、著者は「戦争・軍隊と障害者問題」の史的研究を行った。それは、太平洋戦争(15年戦争)と著者のライフストーリーの関係の物語のようにも思われる。

(2) 障害者(児)教育学への歩み

しかし著者は、「兵員になれない障害者を人間として認識し、尊重する気持ちは障害者教育学を専攻するまで抱けなかった」と振り返っている(清水2022, p.8)¹⁾。

著者は、どのように障害者(児)教育学を目指し、その道を歩んだのだろうか。その足跡を知ることは、「戦争・軍隊と障害者問題」という清水教育史学の中核を知る上で重要であると考ええる。

著者は、東京教育大学(1978年閉校。後に、関連施設・機能は筑波大学に移管)の教育学部特殊教育学科に1955年に入学した。もともと、医学部への進学を希望していたが、試験結果の兼ね合いで1年浪人した。その時、「多少、医学的な勉強もするらしいということを受験案内書で知って」、同学科に入学を決めたとされる(清水1981, p.11)。

そうしたこともあって著者は、「障害児教育の意義はもちろん、『特殊教育』というものが、どういう子どもたちを対象とする教育なのかということさえよくわからぬまま入学した」(清水1981, p.12)。この状況は、3年生になっても続き、「障害児の教育とか研究を自分の生涯の仕事とするのだという深い自覚を持ってないでいた」という。

それゆえ著者は、先輩のすすめで夏休みに特殊学級の子どもたち向けの林間学校の指導補助員となって、子どもや先生と関わるという経験も積んだ。著者にとって、それは「生きた勉強」になったが、同時に「新たな不安や悩みも生まれた」(清水1981, p.12)という。すなわち、林間学校での生活において、「どうしても苦手な子というか、心からなじめない子がなかにはいる」ことであり、「私はとてもこの子らの教師になる力も資格もないと、内心、かなり真剣に思いつめて」いた。

こうした中、著者はある一冊の本に出会う。『道は遠けれど—ともに特殊教育に携わる父と子の記録—』(近藤益雄・近藤原理1958)である。長崎県で知的障害のある子どもの特殊学級の教師である近藤益雄(1907～1964)と、その息子であり当時、同

じく特殊学級の教師であった原理による往復書簡をまとめた本である。

著者は、障害児教育に打ち込んでいる親子にやや「驚きに近い興味をいだき」、この本を購入した。実際に読むと、著者は「この道（紹介者注：障害児教育）に生きるために必要な何か確かなものをつかむことができるかもしれない」という「漠然とし」つつも「おさえがたい強い期待」が生まれ、近藤益雄に会ってみたいと考えた（清水 1981, p.12）。

そして著者は、東京大学から非常勤に来ていた三木安正（1911～1984）にその旨を伝え、快く近藤への紹介状を書いてもらった²⁾。

こうして近藤に出会った著者は、彼に「本当にこういう子どもたち（紹介者注：知的障害児）が好きなんですか？ きらいな子は、一人もいないんですか？」と訊ねたとされる（清水 1981, p.13）。

すると近藤は、「います」と答え、「すきになろうと思っても、なれない子も実はいます。なろう、なろうと思えば思うほど、心が冷えてしまう。そういうことさえあります」と続けた（清水 1981, p.13）。

著者が、そうした時はどうするのか尋ねると、近藤は下記のように答えた。すなわち、「その子といっしょに、しずかな山に行って一日どんぐりを拾うとか、白い雲を眺めて、ふたりですわっているとか、そうすると、夕方頃、なんとなく気持ちが通じてきて、おだやかになって理解し合えたような気持ちになって戻ってくる」。

近藤の言葉を聞いて著者は、下記のように「心の中で」考えたという（清水 1981, pp.13-14）。

あっ、こんな立派な先生でも人間なのだ。心の弱さを持っているのだな。その弱さを変えようとして、この子らといっしょに生活をしているのであれば、僕にもできるかもしれない。……（後略）。

そうだ、この子らと出会ったことを大切にしよう。この子らの問題を避けていったのでは、人生においていつでも自分の弱さに目をつぶって生きていくことになってしまうだろう。この道の中で自分も生きていこう。この先生の後をついて、人間として成長していきたい（紹介者注：下線部は紹介者）。

著者は近藤との出会いという「青春の行脚」によって、さらに障害児教育に打ち込み、人生をかけるようになった³⁾。そして近藤が自死を選んで以降、著者は近藤への思慕は強くなったとされる。

それは、「近藤先生が教師として非常にすぐれている、人間として立派であるから慕っている、ある

いは障害児教育史の人物として研究しているというよりも、むしろ一人の教師として、人間として私たちと同じ弱さや矛盾をかかえながら誠実に人間らしく生きようとした、その生き方にひかれている」という思いであった（清水 1981, p.14／紹介者注：下線部は紹介者による）⁴⁾。

（３）著者にとっての出会いの意味

大まかなまとめになってしまったが、上述したような原体験があって、著者は障害者（児）教育学を志し、冒頭の表１に示したように多様な領域に広がる研究を展開したといえる。

その一つが、「戦争と障害者問題」の史的研究であった。著者とその家族との生活経験と、障害児教育に真心と命をかけて尽力した近藤との出会い、という二つの原体験を通して、著者は研究姿勢と思考を揺さぶられながらも磨き深めることで、史的研究に邁進していった。

史資料の猟書及び読み解きと、関係者への聞き取り調査（出会い）を徹底的に行う著者の研究姿勢は、歴史的な事実の解明とともに障害児者の「生き方」とその意味を追求する表れの一つかもしれない⁵⁾。

また、戦時下の生活という極限状況にあって、「自分の弱さ」を「思い詰めていた」「思い込んでいた」と考えた著者は、障害者教育史の研究を通して、「自分の弱さ」に向き合い葛藤しつつも、それから解放されたともいえる。そこには、近藤や障害児者などさまざまな人間との出会いをもとにして、著者が自身の思想や理念を磨き直し、研究活動として具体化した営みがあった。

著者のこうした営みがバックグラウンドにあるからこそ、紹介者は著者の研究に圧倒されつつも、その研究の意義を学ぶことができたのだと思う。

研究は、客観性、実証性や論理性が必須であるが、研究者自身の問題意識がなければ行うことはできない仕事だといえる。その問題意識を醸成する上で、研究者自身の原体験の重要性を改めて学んだ。

（４）著者の研究から得られる展望

著者の２冊の研究書は、今後、「戦争・軍隊と障害者問題」の史的研究を発展させる上で有益である。その上で、太平洋戦争下の社会と障害者の緊張関係について、史料と当時を生きた関係者への聞き取り調査をもとに分析することは欠かせないと考えられる。

②の著書の副題にある「被害と翼賛」は、その緊張関係を端的に表している。本図書紹介で見てきたように、障害者が差別・偏見にあった中で、戦争に

協力しようとする矛盾があった。

それは、意図的・無意図的にかかわらず、障害者による協力が皇国民として承認されることにつながっていたり、疎開という戦時下の政策を活用することで障害児者の生命を守ろうとしたりするなど、社会（政策）と障害者の緊張関係の間にある矛盾である。

この矛盾を客観的にかつ構造的に理解する上で、戦時下の教育と社会のマクロな状況分析（上からの歴史分析）だけでなく、障害者の教育・生活経験からの語り直し（下からの歴史分析）が求められよう。その意味では、これら2冊は、今後の研究を行う上で基礎文献になる。

ところで紹介者は、博士論文を通して、1970～1980年代の京都府下における「共同教育」を素材に、多様な差異に応じる「共生」の教育について考察した。

そうした関心もあり、「共生」の教育における「戦争・軍隊と障害者問題」の教育内容と教材を創造する上でも、著者の研究は重要な資料になると思われる⁶⁾。

多様な人間を承認し、権利保障に向かう「共生社会」の創造に向けて、教育の役割と責任は大きい。その際、歴史を通して戦争と平和を考えることは、意味のあることだと考える。

2022年2月24日に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まり、その戦禍は現在も続いている。

「すでにわれわれは第3次世界大戦のさなかにある」という指摘(NHK 2022)がなされている中で、我々は改めて戦争と平和の危機に立たされている。

この危機を解決できるかどうかは、今を生きる我々がどのように連帯を深めるかが鍵となる。ここでは、じっくりと地に足をつけてさまざまな人々と対話を重ねることは必須であると考えます。

今回紹介した2冊は、対話を行い、平和を希求する実践と研究を進める上で重要である。研究書であるため、アクセスのしやすさや値段のハードルはあるが、さまざまな方に手をとってご一読していただきたい。

(かなまる あきとし)

謝辞

清水寛氏、船橋秀彦氏（福祉型専攻科シャンディつくば）、渡部昭男氏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科名誉客員教授、大阪成蹊大学特別招聘教授）には、多くのご助言と資料提供をいただいた。また清水氏には、原稿をお送りして、ご指導をいただいた。加えて、田中テキスト勉強会の皆様にも、アドバイスやご意見をいた

だいた。ありがとうございました。

注

1) 埼玉大学に勤務していた著者は、「障害者教育史ゼミナール」を開講して、ゼミ生や研究生と共に「戦争・軍隊と障害者問題」について研究していた。共同研究論文などの成果物も数多く提出されているが、例えば、そこには篠崎恵昭も参加していた。篠崎は、埼玉県の小学校教師であり、1975年に浦和市立別所小学校（現さいたま市立）に入学した全盲の浅井一美さんの担任も勤めた。全盲の子どもを公立小学校の通常学級で初めて受け入れた全国初の「統合教育」の実践者である。

篠崎は、「大西問題を契機として障害者の教育権を実現する会」に参加しながら、30年近く著者とも交流を深め、「戦争・軍隊と障害者問題」に関して著者と共同研究をおこなってきた。

篠崎は、1933年生まれであり、戦時下を生きた経験が、著者との共同研究の原体験になっているという（篠崎・清水1997, p.49）。また、篠崎の子どもが聴覚障害を有していることもあり、「五体満足」という「社会通念」の中に優生思想が潜んでいると考えていたとされる（篠崎・清水1997, pp.29-30）。こうしたバックグラウンドを持つ篠崎と著者には、「戦争・軍隊と障害者問題」に関して、「共通の問題意識」を有しているという。それは、「アジア・太平洋戦争の時期における天皇制政府によるいわゆる優生政策の本質とその構造、さらにはその政策と国民の側にも内在している優生意識とその関係など」であり、篠崎と著者は「戦争と障害者問題」の史的研究において追求していた（篠崎・清水1997, p.49）。

なお著者が退官された時は、共同で記念論考も執筆している（篠崎・清水2002）。

2) 三木安正は、戦後の知的障害教育の政策的基盤を整備した中心人物の一人である。彼の仕事としては、文部省事務次官と文部省視学官に任命され、教育上特別な取扱を要する児童生徒の判別基準の作成、精神薄弱児実態調査の実施、養護学校学習指導要領の編成などである。さらに知的障害児のための旭学園（日本初の私立学校）の創立、特殊教育研究連盟（現在特別支援教育研究連盟）の創設など、実践的な側面からも知的障害教育の基盤形成を図っている。なお著者は、三木から糸賀一雄、岡崎英彦、田中

昌人にもあった方が良くと勧められ、近藤に会いに行く前に近江学園を訪問している。

- 3) 清水 (1986) には、近藤との出会いと対話について、詳細にまとめられている。近藤は、下記のようにも述べている(清水 1986, p.178). すなわち、「精神薄弱児 (紹介者注: 現在の知的障害) と精神薄弱児教育 (紹介者注: 強調部は著者自身による) を一応分けて考えてみるとよい。後者は、自分の問題と、社会からの位置を考慮して考えること」である。そして、「精神薄弱児が『徹底的に好き』という程にはなりきれぬ、又なれなくてもよい」「精神薄弱児教育に大きな関心を持つからこそやっている」という。この言葉も著者に大きな示唆を与えた。
- 4) さらに著者は、「人生の転機を与えてくれた教師について、もっと客観的に知りたいと思い」、大学院に進学して、生活綴り方の歴史などを学んだ(清水 1981, p.14)。そして東京教育大学の大学院紀要に、論文「近藤益雄における生活綴方教育から精神薄弱児教育への発展」を 1966 年に投稿した。これが著者の初めて書いた投稿論文であったとされる。なお、この論文は 1969 年に教育科学研究会編纂の『教育』(1969 年 1 月号)に転載された。本図書紹介では、初出論文を文献リストに記載しておく。
- なお船橋氏によると、著者は現在、改めて近藤益雄に関する研究に取り組んでいるという。
- 5) 船橋氏によると、著者は関係者や学校・施設・園など現地に何回も足を運び、対話を行うことを徹底的に行っているという。例えば、関係者の中には、最初からインタビューに応じることがない(あるいは心情的に難しい)方がいることもある。著者は、まず関係者に、自身の研究目的や趣旨をととても細かく丁寧に説明しながら、対話を重ねるという。話をしても良い、するに足ると思ってもらえるように対話を重ねているように思われる。関係者を対等な存在として尊重する著者の研究姿勢の一端が垣間見える。なお、この点については、篠崎・清水(2002)においてもさまざまなエピソードを通して詳述されている。
- 6) 授業を行う上で教材研究は欠かせない。例えば船橋・平沢 (2015) は、『《完結編》はくのおじさんはハンセン病—平沢保治 (ひらさわやすじ) 物語—』を全国障害者問題研究会茨城支部の HP にアップしている (<http://ibashouken.web.fc2.com>)。著者の平沢はハンセン病の当事者であり、小学生から大学生に

渡って講演活動を展開している。こうした成果物も、今後の授業創造には有益であると考える。

文献

- 青木純一 (2020) 「図書紹介 清水寛著『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所 多磨全生園を中心に』」『教育学研究』第 87 巻第 3 号, 420-421.
- 船橋秀彦・平沢保治 (2015) 『《完結編》はくのおじさんはハンセン病—平沢保治 (ひらさわやすじ) 物語—』全国障害者問題研究会茨城支部の <http://ibashouken.web.fc2.com/home.html/> (最終確認日 2022 年 12 月 19 日).
- 河合隆平 (2019a) 「図書紹介 清水寛著『太平洋戦争下の全国の障害児学校 被害と翼賛』」『教育学研究』第 86 巻第 3 号, 409-410.
- 河合隆平 (2019b) 「書評 清水寛著『太平洋戦争下の全国の障害児学校—被害と翼賛—』(新日本出版社 2018 年 10 月)」『社会事業史研究』第 56 号, 135-148.
- 近藤益雄・近藤原理 (1958) 『道は遠けれど—ともに特殊教育に携わる父と子の記録—』麦書房.
- NHK (2022) 「NATO 元最高司令官『すでにわれわれは第 3 次世界大戦のさなか』」<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220509/k10013616731000.html>. (最終閲覧日 2022 年 12 月 19 日)
- 西村章次 (2002) 「清水寛教授の人と業績」『埼玉大学紀要教育学部 (教育科学Ⅲ)』第 51 巻第 1 号, 1-7.
- 西島悟司 (2019) 「書評 清水寛著『太平洋戦争下の全国の障害児学校:被害と翼賛』を読んで」『人間発達研究所』第 34 巻第 3 号, 14-18.
- 小川修一・清水寛 (2021) 『清水 寛 著作関係目録一覧 (発行年月順) — 2020 (令和 2) 年 1 月 ~ 2021 (令和 3) 年 3 月付・書評 [Ⅳ] —』埼玉大学.
- 岡田靖雄 (1981a) 「戦前の精神科病院における死亡率」『医学史研究』第 55 号, 1-7.
- 岡田靖雄 (1981b) 『私説 松沢病院史 1879 ~ 1980』岩崎学術出版.
- 岡田靖雄 (2019) 「書評 清水寛著 太平洋戦争下の全国の障害児学校:被害と翼賛」『季論 21』第 44 号, 229-231.
- 大高俊一郎 (2021) 「書評 清水寛著『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所:多磨全生園を中心に』」『同時代史研究』第 14 号, 96-100.
- 清水寛 (1966) 「近藤益雄における生活綴方教育

- から精神薄弱児教育への発展』『東京教育大学教育学研究集録』第6集, 61-70.
- 清水寛 (1981) 『障害児教育とはなにか—教育の真実を求めて—』 青木書店.
- 清水寛 (1986) 「わが胸に緑の樹生い茂りて」 近藤原理・清水寛編『この子らと生きて—近藤益雄とちえおくれの子の生活教育—』 大月書店, 169-186.
- 清水寛 (1989) 「第2次大戦下の全国の障害児学校・学級および障害者施設の戦争被害に関する実態調査」『埼玉大学教育学部紀要 教育学部 (教育科学Ⅰ)』第38巻第1号, 27-49.
- 清水寛 (2021) 「“地球時代”を共に生きるために—戦争・軍国主義の原体験から—」『治安維持法と現代』2021年秋季号, 77-83.
- 清水寛 (2022) 「戦争・軍隊と障がい者問題の史的研究に至った体験」『けんこうと平和』No.356, 8-9.
- 篠崎恵昭・清水寛 (1997) 「アジア・太平洋戦争下の優生政策と障害者問題 (1) 第75回帝国議会衆議院優生法案委員会の「国民体力管理法案」審議の検討」『埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学Ⅰ)』第46巻第2号, 29-49.
- 篠崎恵昭・清水寛 (2002) 「“人間は三度生まれる”の実現を—清水寛さんとともに学んできた30年近い歳月をふりかえって—」『埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学Ⅰ)』第51巻第1号, 75-126.
- 高橋浩平・清水寛 (2002) 「清水 寛著作関係目録一覧 (発行年月日順) —1959 (昭和34) 年2月～2002年 (平成14年) 3月—」『埼玉大学紀要教育学部 (教育科学Ⅲ)』第51巻第1号, 127-181.
- 輪倉一広 (2021) 「書評 清水寛著『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所: 多磨全生園を中心に』」『社会事業史研究』第59号, 93-100.